自作自演売りの少女

甲板ニーソ

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

此処に綴られるは在りし日々の優しい記憶

井の中の蠱毒にて、少女は井の中の孤独へ至る。

無垢なる願いの後に残るは塵芥――――これは呪われた者たちの物語

『こちらの作品はＡｒｃａｄｉａ様にて同時掲載をしております』

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 14

第1話

赤いランドセルに備え付けの留め金に掛かった巾着袋から、学校指定の体操服と紅白帽子を取り出し指差し確認。眼前に鎮座するそれらすべては遥か昔の在りし日々の記憶を懐古させる品々でありながら、身に纏えばこれ以上ないほど似合う有様。

名札にはひらがな5つでこくらとも……漢字で記せばたった三文字　小倉　智なのに態々ひらがな。だが……おかしなところは何らなく、むしろ違和感を覚えている自分こそが異端そのもの。まぁ……何の因果か女子小学生やってます。

◇　◇　◇　◇　◇

ブラック・ブレット『自作自演売りの少女』第一話　井の中の蠱毒

◇　◇　◇　◇　◇

「朝食もう出来ちゃってるから、座って食べちゃいなさい。冷めると不味いんだから……ほらお父さんも新聞読んでないで」

母親の催促に首を縦に振ることで答え、朝の空きっ腹を解消すべく食卓に着けば、食欲をそそる香ばしい匂いがお出迎え。洋食の朝定番メニュー外食、喫茶店やファミレスでもお目にかかるソーセージ・目玉焼き・野菜の付け合せを口に運ぶ。

未だに違和感は拭えないが、些細なことと飲み込んだ。違和感を覚えた原因は単純、現物から想定される味と実際の味にズレが生じているからである。例えると牛肉を食べた筈なのに舌が感じたのは鶏肉とかそんなズレ。見た目似せただけの合成食料だからさもありなん。

じゃあ代替物の合成食料を食べ慣れているのは何故かって？一般的には今の人間様はかつての隆盛を鑑みれば見る影もないぐらいに生存域を失ってしまっているからであった。俺が住んでる東京を中心とした関東の一部からなる東京エリアを含めて、文化的な生活を送るのを可能とする区域が日本でたった五箇所な辺り笑えない。よって天然物は中々に高級食材、少なくとも庶民の食卓に毎日上るのが困難な程度には……さて、連々と述べたがうちの家、庶民にしては裕福な立ち位置で、実は天然物を週に数回以上は余裕で食べれる稼ぎ。でもお祝い事を除いて基本紛い物な理由は自身の生まれにあった。

生まれが生まれなため、万が一に備えてお金が入り用なのである。ただでさえ変な子供なのに厄介な特性持ちとか肩身が狭くてしょうがない。これが親とも思えぬ人でな

しなら、容赦なくたかれるが……昨今では大変珍しい私的世界遺産との呼声も高い善人なので始末におえない。罪悪感でのたうち回りそう……過去に罪の意識で眠れぬ夜を過ごしたこともあったり。

「ん?どうした智。眉間に皺寄せて可愛い顔が台無しだぞ?」

「給食のご飯はその……ちょっと微妙なのに、家のご飯は美味しいなぁって……どっちも同じ様な食材使ってるのにどうしてかなって思ったの」

「その疑問の答えは簡単さ。母さんの料理は調理に一手間掛けてるから同じ紛いもんでも違いを感じるのは当然なんだよ!」

デレデレとしながら自慢げな表情で語る。特定個人を想って作った思いやりの結晶なんだからと。

賛同の意を示すと、母さんは今の時代お腹一杯食べれることだけでもありがたいことと俺を窘めるものの、日頃よりも早口で、エプロンを揺らして去っていく後ろ姿からも照れてるのがまるわかりであった。葛藤を見抜かれ誤魔化しに掛かったけど、嘘は言ってないので許して欲しい。

「そうそう、コンタクトはきちっと付けていきなさい。集団生活にはもう十二分に慣れた頃合いでしょうけど……下手に慣れきった時が一番足元掬われ易いって相場が決まっているしね」

「忠告ありがと。何事も石橋を叩いて渡れだね」
返答に満足したのか、洗い物に専念して後に続く言葉はない。速やかに洗面所に向かい歯磨き諸々済ませよう。

◇　◇　◇

イチゴ味の幼児用歯磨き粉が妙に甘ったるく、口を必要以上にゆすいでしまった。目は悪いどころかアフリカ原住民に並ぶ2．0にも及ぶが、度なしのコンタクト……それもカラコンを手慣れた手付きで目元へ。失明の危険すら孕む、生物学上必要もない異物で瞳を覆わせるのを念押しするのには無論わけがある。じゃなかったら誰が好き好んで……愛を以って接してくれてるのが、ありありと感じられる我が身を危険に晒すものか。すべては現代の魔女狩りから逃れるため……生まれながら奇病に罹患していたが故の災難から身を守るためだった。
「――――攫われて、実験されて頭のなか弄くりまされたって……バックストーリーもなしに、感情が高ぶると目が爛々と赤くなる……まるで漫画みたい」
黒から血を連想させる赤へと瞬く間に切り替わる。巫山戯た世界の在り方に文句を吐く前に、此処に自分が存在してる方が、よっぽど摩訶不思議かと囁くように独り言ち。

スイッチを落として改めて鏡を見つめる……見つめ返すは人形の如く整った腰にまで至る長髪の童女。髪も目も吸い込まれそうな漆黒で、歳は初等部の一二年であろうと推察される出で立ち。

俺が鏡に触れれば彼女も触れる。溜息を発せば彼女も溜息……俺と彼女は＝で同一人物、行動が一致して当たり前だった。二度目の人生、二度目の小学生。しかも前世とは近くて遠い異世界に輪廻転生。徳を積んだ覚えもない宗教ごった煮の信心さが皆無の典型的日本人がだ……笑うしかないだろう。誰が予想説明できる？予測不能回避不能の奇跡の体現。前世最高の頭脳集団だろうと匙を投げる。分野が違う……科学の範疇を逸脱して魔法の領域、況や量産型文系大学生だった非才が理論付けしようなぞ烏滸がましい。早々に見切りをつけて今世について頭を悩ますことにしたのである。

女の癖して内心の一人称が俺だなんて乱暴なそれなのは十年も遡れば男であった名残で最後の牙城。お赤飯を炊く節目を迎えてないおかげで、未だ性差の戸惑いは薄いが……いずれ必ず来る第二次性徴に際して取り乱さずにいられる自信は毛ほどもない。

――――無事１０の誕生日まで辿り着けるかも怪しい奴が気にするだけ無駄かもしれないが……

「行ってきまーす」

両親から額に交互に接吻を受ける恒例の儀式を終えて、通学路を往く。俺を介して間

接キスするのはいかがなものかと考えつつも結局は、仲良き事は美しき哉と思い直して、春風を頬に受け、熱くなった体を落ち着ける。

「また、赤目の化け物が事件を引き起こしたらしいわよ。しかも被害者は大怪我で病院に搬送されたらしくて、意識不明の重体ですって……本当物騒よね」

「私最近不安で不安でしょうがないわ。お偉いさんたちも重い腰を上げて駆除に動いて欲しいのに保護に注力だなんて、見当違いも甚だしくてやになっちゃうわ」

無駄に耳聡い聴覚が雑踏に混じった雑音を拾い上げるのが辟易の種だ。聞きたくもない井戸端会議の内容すら鮮明に届く、過ぎたるは及ばざるが如し。人間の嗅覚が犬並みなら、些細な悪臭でも嗅ぎ分け、日常生活が困難になるだろう。

しかし――――駆除だなんて、野犬を保健所が殺処分するみたいな気軽さには眉を顰めざるを得ない。あの調子なら近くに居る少女が、彼女たちが揶揄する化け物だと知った途端、金切声を発して罵詈雑言を浴びせるのは想像に難くない。

例えそれがなにもしてない状態だろうとだ……可能性があるだけで断罪するに躊躇はないらしい。世代から察するに赤目に対してＰＴＳＤ、心的外傷後ストレス障害あるとはいえ些か以上にいき過ぎである。さながら潜在犯扱いで、世間様からは白い目で見られるだけには飽きたらず、危害さえ加えられこともしばしば。必死に隠す理由もお分かりいただけたと思う。

救いのないことにこれでも東京は聖天子、？で名前を囲みそうなネーミングのエリアトップを張ってるお方が、奇病の罹患者に対して優しくあらせられるおかげで他の地区より差別が温いのだが、それでもこのご覧のあり様……思わず目からしょっぱい汗が流れ落ちそう。

行きつけのスクールバスが停車してるのを確認してスカートを翻さない程度の早歩きでタラップを登り、指定席めいた場所へと座る。同級生含む在学生に注目を浴びぬのを心がけて、曇った表情をなるたけ楽しいことを意識して和らげに務めた。次の停車駅では懇意にしてるクラスメートとも会うので話題作りにも余念がない。

「麗華ちゃん、お久しぶり。連休どうだった？」

手を軽く振り、顔を覗き込むように体を乗り出して幼稚園時代からの馴染み、草津麗華に興味津々といった体を装い話しかける。お喋りなこの娘ことだ。話の取っ掛かりさえ作ってあげれば、後は聞き役に徹するだけで話が進むだろう。比較的会話の組み立て楽で助かる。

「うん！最近改装した水族館でイルカさんのショー見てきたけど楽しかった。金曜からお休みで……え～と、金土日月で今日は……ん～とん～と」

「一週間は7日で月火水木金土日、昨日は月曜で明日は水曜、さて今日は何曜日？」

「火曜日！指を曲げると5回だから5日ぶり。こんなに長く合わないの珍しいから

ちょっと寂しかった……」

前世の主観、大人というにはまだ未熟だった、二十歳前後の物差しからすると、たった5日なのに大袈裟なとも思うが、子供の頃に経験したことは誰もがある例のあれ……小さい時の体感時間は異様に長かったりするもの。ご多分に漏れず麗華も、友達と離れ離れになっていた寂しさを埋めにかかったと見て間違いない。

「そうそう! 智は先週の天誅ちゃんとみた? もちろんテレビの前で釘付けだったわよね」

「麗華ちゃんの言う通り、片時も目が話せなかったよ……特にイエローの決め台詞の件辺りはね」

あのシーンは色んな意味で凄かった……驚きの余り、口を半開きにして固まるという間抜けな絵面を晒してしまったぐらいだからな。

「わざわざ、進めた甲斐があったじゃない。あそこに目を付けるなんて見込みあるわ!」

「あはは……そうかなぁ?」

「絶対そうよ。悪漢共に対して舌っ足らずに、おにーちゃんのハートをズキューーーンと射抜いちゃいます♡ってのは可愛くて撫でたり抱きしめたりしたくなるわぁ」

確かに作画も気合入ってたし、声優の演技もキャラにあって愛らしかったが、流石にその感想にはお兄さん同意できそうにないわ。だってさ? 決め台詞と供に物理的に敵

の心臓射抜いて血反吐吐かせて絶命させた上で満面の笑みとかーーーどこのサイコパスだよ！

おジャ魔女や東京ミュウミュウ系統の路線かと思ってたら、萌え絵のスプラッター番組だったのである……度肝抜かれたね。

「クラスのみんなも天誅にはまってるし、誰それが好きってので今回も盛り上がるのは必死ね。あぁ、言うまでもなくあたしはイエロー推しよ!!!」

ヒートアップが留まるところを知らぬ麗華が熱く語っているのは通称天誅、正式名称天誅ガールズといい。現在民放で放送中のアニメで、題材は忠臣蔵で有名なかの赤穂浪士を元にした魔法少女ものなのだが……何をどうトチ狂ったか、ゴールデンにホラー映画も真っ青なレベルの臓物飛び交う闘いを展開するクレイジーアニメである。

内容だけ聞くと一部の大きな子供たち以外には敬遠されそうなもんであるのに、大きな子供どころか小さな子どもに至るまで、まだたった数話の放送で心を掴んで離さぬ人気を博しているそうだから、事実は小説よりも奇なりとしか言えない。昔の日本の首相じゃないが、彼の語録を借りたいと思う……流行情勢は複雑怪奇なり。

――――話し込んでたら、学校はもうすぐそこ。今日もまた苦行が始まる。

◇　◇　◇

小学校というのは基本、放課後しかも平日18時以降にでもならなきゃ静寂とは最も縁遠い場所の1つで、ある種動物園と読んでも差し支えない。
「とも～今日の私なにか違ってみえない？ひと味ちがうしょっ？」
「ともちゃん、連休明けの宿題の絵日記終わらないよぉ～手伝って」
「とも～天誅ガールズごっこしましょ。あなたバイオレットね」
てんでバラバラに話しかけてきて、且つまったく異なる役割を求めてくる。幼稚園という集団生活もどき経験した程度じゃ、我慢のがの字もありはしないのであった。
「まーちゃんは髪留め変えたね……フリルがお洒落でよく似合ってるよ。みぃちゃんは、連休中にやったことを口頭で羅列して、それらしい台本を書き上げるから、台本を元に自分で書くこと。けーちゃんはごっこをするのはいいけど、バイオレットはあんまりだと思うの！考えなおして」
知識のみならず思いやり、社会性を身につける場ではあるものの。低学年に期待するのは無理無茶無謀、俺が私がの自分本位さを建前にも包まずに無責任に放り出すのが常。
「だよねぇ～鈍い子たちばっかで、呆れ果てちゃうところだったしょっ！」

「わっ……わかった。遊園地に行って、観覧車に乗ってメリーゴーランドに乗って、ジェットコースターは身長が足りなくて断念してーーー」

「やっぱ、だめか～不人気は持ち回りにしないと無理ゲーかな?」

周りに目を配れば、狭い教師の中を走り回った挙句転んで、痛みに耐えかねて転がりまわる奴。スカート捲りを狙って獲物を物色してる悪戯っ子、些細な行き違いで口論する者と面白がってそれを煽る野次馬……視界に入れるだけで、授業が始まってもいないのに気力が尽きそうである。

「おらぁっ!てめぇらチャイムはもう鳴ってんだぞ。廊下に立たされたくなかったら、速やかに席につけ!」

調教師もとい壮年の担任が現れると蜘蛛の子を散らす如く、机へと着席。一瞬得難き、静寂が教室を包むが、数分もしないうちにお叱りも忘却の彼方……囁きあふれる辺り、喉元を過ぎ去れば熱さを忘れてしまうのだろうな。

◇　◇　◇

――――習ったことも復習レベルなら、やることに否はない……でも短期間に同じこと延々とやらされるのは誰であろうと嫌気が差すのではなかろうか?

「２０２１年に何の前触れもなく世界各地に出現し、人類を絶望の淵に叩き込んだ寄生生物、ガストレアは猛威を振るい――――」

分かりきったことだからと舐めてかかって上の空だと例え、正しい答えを返せたとしても担任からの悪印象は避けられず。周囲から悪目立ちで浮いてしまう。波風立てずに暮らすには真面目に授業を受けるしかないのであった。これが中々にキツい、精神が摩耗する。

「敗北に次ぐ敗北を重ね。当時の人口が極端に落ち込む大絶滅が引き起こされたところまでは前回の授業でやったな？お浚いだ！出席番号十だとあ～小倉、それによって人間の変異種が生まれ始めたわけだが、そいつらなんて呼ばれてるか分かるか？」

「……呪われた子供たち……でしたよね？」

「正解、忌むべきガストレアの病原菌の宿主で最近の治安悪化の大本と目される。危険人物たちだろ、奴らの棲家になってる外周区には怖いもの見たさで迂闊に近寄るんじゃねぇぞ。危険で一杯だからな。後町中で、てめぇらと同年代の小汚い女が居たら、まずそれも呪われた子供だからな覚えとくように」

は～いという聞き分けのいい返事の合唱が、罪がなくとも忌々しい。担任の説明も間違っちゃいないが、悪戯に差別を助長するもので非常に歯痒のだ。

蔑称で蔑まれる呪われた子供たちだって、九分九厘はそうせざるを得ない崖っぷちに

追い込まれたが故の行動なのに……ガストレアと同じ赤目だったというだけで人間性は鑑みられずに親に捨てられてゆく。酷いと生を受けたその日にあの世へと送り返される。

普通の暮らしを心がければ、おかしくならずに天寿を全うできるのに管理もせず、臭いものには蓋。こんな環境で自棄っぱちにならないほうがおかしい。明日への希望が持てない歪んだ世界なのだ……大半の奇病に罹患者にとっては……

――――だから改めて想う。俺こと小倉　智は恵まれていると。人々に望まれないモノでありながら両親からは、人並み以上に愛を与えられ、温かい食事とふかふかのベットでの眠りを心配せずに迎え続けられる。優しい世界の住人であれるのだから。

第2話

◇　◇　◇　◇　◇

ブラック・ブレット『自作自演売りの少女』第二話　井の中の孤独

◇　◇　◇　◇　◇

連休明けから早数日、光陰矢の如しで、明日はもう金曜である。あぁーーー花金が待ち遠しい。花の金曜日、もう世間様的には廃れて久しい死語に相当するものの、個人的には未だ現役。子供の頃土曜は、隔週の半ドンで朝のアニメを途中で切り上げ、尻切れ蜻蛉のまま学校へ向かわねばならなかったのも今は昔。

国民総ゆとり化でも目指してたおかげか、公立小学校は目出度く一ヶ月まるまる土日休日のままであった。

「ごめんねぇ……智。先週は休みだったのに特別なところには結局何処へも行けなくて……」

柵から開放され、高揚しているある夜のお茶の間で、前振りもなく急に母がそんなことを言い始めた。妙に申し訳無さそうな面持ちで……軽く混乱したが、一応心当たりは

あったものの、行楽が中止になったのは故意ではなく、致し方のない理由があったが故。謝罪を受ける理由が見当たらず、一体全体どうしたことかと首を傾げざるを得ない。

「ん～？どうして謝るの？お母さんなんにも悪くないよね？」

「でもよ……態とじゃないからって、前から約束してたレジャーランドの件、破っちゃったじゃない。親としてちょっと恥ずかしくてね……」

趣味で真実行きたかったのなら兎も角、ゴーカートで思う様、速度制限名一杯。アクセル全開でもたかが知れた爆走？が精々の楽しみなレジャー施設をドタキャンされたぐらいじゃ怒るに値しないのだけれど、両親からするとそうじゃないらしい。

個人的には態度を繕う必要がない分、自室でゴロゴロ羽を伸ばせる方がいい息抜きになるので嬉しがったが、少々子供らしさを放り投げてたかもしれないなと反省。

「あのね私からすれば、遊園地に一緒に向かうより……家族が1人増えたことのほうが嬉しいプレゼントだったの。だからさ、落ち込まないで喜ぼう！お腹の中の赤ちゃんだって、そう願ってるはずじゃないかな？」

本心からで場を和ますための嘘なんかじゃない。俺は見た目子供なだけで中は中途半端に賢しいせいで、歳相応に振る舞おうとしても何処かでボロが出る。

実際――――

「我が娘は本当に大人びてるな。親の立場を察せられたり、フォローしてくれたりと偉

いと思わず頭を撫でまわしたくなる」

　以下の台詞を述べられ、頭をワシャワシャとされてる今も、払いのけるなぞ以ての外と律してキャッキャと喜色を表そうとしてるのに、羞恥心で顔が林檎のように真っ赤になって硬直する醜態を晒してる辺り、隠しきれてないのが見透かされていよう。

「その意見には賛成だわ。私がこの娘の年代の時に同じ仕打ちされたら、相手に否がなくとも感情的にならない自信がまるでないもの」

「あぁ、俺だったら、泣き喚いた上にお腹の中の子に逆恨みで怨み辛みを募らせてたろうよ。智を見てると昔の自分が如何に自分勝手だったかって、思い知らされる」

「親は私たちの世話に相当手を焼いていたのでしょうね」

「だろうな……でも親の身になって初めて感じたが、子供の世話を焼くってのも意外と楽しいもんだ。その点家の娘は大抵独りでなんでもやってしまえるから、ちと寂しいが……」

「お風呂に入っても髪も体も独りで洗ってしまえるし、湯槽にも６０秒不正なく数えてるのも嬉しい半面、煩わせて貰えなくて……確かに物足りないかも」

　言外にもっと頼ってくれてもいいのよ――という雰囲気を漂わせてるのが、ありありと感じられる。期待に答えられない我が身の不明を恥じ入るばかりだ。幾らできる事をできない振りをするのが難しかったとはいえ……最初によく出来た子を演じよう

として、何でもかんでもやり過ぎた。
「う、うん。困ったことがあった時は、迷わず相談するから頼りにしてるよ」
喜色満面で両者ともに力強い即答……子供らしい親子の触れ合いが思った以上に不足してたのかもしれない。二度目の小学生なのに、あちらを立てればこちらが立たず。零れ落としたもの多く、中々上手くいかないものである。
気軽に手伝いを頼もうにも今更、夜独りじゃお手洗いに行けないとか、歯磨き手伝って、服を着させてって……頼んでも実績があるだけに、寂しさを紛らわすために気を遣ってるのがバレバレである……それはそれで微笑ましい物があるのだろうけどナニカが違う、普通じゃない。
「女の子かなぁ？男の子かなぁ？出来れば男の子だったら嬉しいんだけど……昔から弟が欲しかったもんね」
押し付けるようで悪いが、下の子には色々と期待してる――俺じゃ録に体験させてやることが叶わなかった。育児に付きものな苦労が故の達成感と喜びを得られるよう。
「智はせっかちだな。性別判定が可能になるのは妊娠から早くて5ヶ月は経たないと無理だぞ。ははっ」
「お目出度からまだ数週間で一ヶ月も経ってないから、先は随分長いわよ。早くて秋口だもの」

妹だったら要らないって訳じゃないが、選べるのなら断然弟のほうがいい。ガストレアの寄生先は漏れ無く女……男であれば何の憂いもなく祝福できるが、女だと生まれるその日まで不安は付き纏う。呪われてるのは自分だけで充分だ……優しく健やかな彼らに相応しい、愛されるための赤ん坊が授けられるべきである。

――それに転生なんて特殊事例を除けば、物心ついたばかりの幼児が、置かれた立ち位置を理解、納得した上で立ち振る舞うなぞ土台無理な話。周囲に露見し、早々に迫害されてしまうのは想像に難くない。不純物に塗れたこの身だが、その点だけは二人にとって助けとなったろう……家族に幸あらんことを。

◇　◇　◇　◇　◇

「あっ――そうそう智、貴方がちょうど外出してた夕方にお友達から電話があったのよ」

「ふ～ん、特に約束はしてなかったはずだけれど……誰からだったお母さん？」

「幼馴染の麗華ちゃんからよ。一緒にお買い物しましょってお誘いだったわ。だから――」

下校の別れ際にもお首もださなかったのにな……思い立ったが吉日を体現してやが

るぞアイツ。筋道立てた行動を求めるのは酷だろうが、少しは振り回される身にもなって欲しいものだ。さて、どうした――

「お誘いありがとう。明日は楽しみにしてますって、返事しといてあげたわ」

もの、や……ら?……って……はっ?き、聞き間違いだとは思うが、耳に勝手に承諾を取り付けた胸の言葉が届いてる……

「覚えがないけど……もしかして私、無意識の内に返答でもしてた?」

母が交友に関して意思確認もせずに、独断で決定したことはただの一度もなく、この齢で呆けたがと、刹那に焦りも露わ。

「うんと返して、百面相して慌ててる姿を眺めるのも惜しいけれど、違うから安心していいわよ」

「おいおい、もうちょっと時間を稼いでくれても良かったのに……残念だ。更に良い構図が撮れたものを」

父に側で写真を撮られてた羞恥を飲み下し問う。会話にも参加しないで一心不乱に記録してたフォルダーの中身なんて知らない。知らないったら、知らない！

「……急にどうしたの?意見も聞かずに約束を取り付けるなんて、今までにない強引さだもん。気になるよ」

「まっ、当然の疑問だな。ネタばらしするとちゃんと理由があってさ、智つい先日ファッ

ション雑誌眺めてただろ」
「あ———そんなこともあったね。でもそれとなんの関係が?」
　流行を察知し、女子の輪から孤立しないために、上辺だけの知識でも構わないと麗華から借りたブツが何故に発端と化したのだろうか?
「あれは眺めるなんて生易しいものじゃなく、凝視。眉間に皺を寄せてまで、真剣に読んでたんだもの。気持ちを汲み取らない訳にはいかなかったわ」
「我儘一つ言わなかった娘が口には出さずとも、悩んでるのを見かけたなら……力になってやらなければと使命感に駆られるのが親ってもんさ」
　頭痛がするが、大筋は把握した。餓鬼の分際でここまで着飾る必要性がないと、主観では判断しながらも……客観は必要性を訴える二律背反のせいで頭が沸騰しそうになってるのを目撃されたに違いない。不幸なのはその姿から、我儘を言いたいのに言えない。いじらしい少女を連想されてしまったことだ。つまりは勘違いが呼んだ行き違い。
「服を買う時だって、私が選んだのを頷いて切るばかりだから心配してたのよ。お洒落に関して興味が無いんじゃないかって……でも安心したわ。隠してただけで、きちんとあったんだもの」
「女の人ってのは、どんな歳だろうと自分を綺麗に魅せたいらしいからな。同僚の娘

だって、あのブランドのポーチや小物が欲しいとか強請ってるぞ。智も偶には遠慮なんかしないで欲しいものを主張してくれて構わない。少なくとも俺はそうしてくれた方が嬉しい――勿論母さんもな！」

既に引き返せないレベルで盛り上がっておられる……誤解を解こうにも解けない。最早こと此処に至っては諦めが肝心。甘んじて好意に身を任せるよしよう。

「じゃあ、お言葉に甘えて麗華ちゃんたちと一緒に買物に行ってくるね。集合の日時と場所は？」

「え～と。お昼を済ませた後の集合だから午後１時に――」

予定が埋まってないのも把握されてることですしね。

◇　◇　◇　◇　◇

電車に揺られること小一時間、乗り継ぎを重ね。入り組んだ改札を抜ければ、眼前に広がるは無数の人。数えるのを放棄したくなる程度に多く、また密度も高い。流石若者の街渋谷である。二十歳前後の学生が溢れ、平均年齢を算出すると１０代が正解であろう。

道行くものたちの顔も皆一様に明るく、過去に大絶滅があったなんてことを微塵も感

じさせない。最早平穏とは空気に等しいものだ。ガストレア戦争、ガストレアとの闘いに人類が敗北して八年の月日が経ている。それをもうととるか、まだととるかは……主観によって相違あろうが、大衆の過半は喉元を過ぎ去れば熱さもなんとやらと爪痕を風化させるに至っていた。

かく言う自分は大戦後の生まれなので、9割が死滅したと教科書にやら書かれているのを読んでもいまいち現実味が薄く、ある種対岸の火事扱い。前世から今日まで平和ボケ、ぬるま湯につかりきった奴に、地獄を想像しろってのも酷な話ではなかろうか？

――広島の原爆ドームの実物、空襲の結果齎された惨状……どれを見聞きしても一刻もすれば趣味に思考が傾く、賢者は歴史に学び、愚者は経験から学ぶ。愚者に類する己は経験とぶち当たらないのを祈るのみ。今日も世界が平和でありますように――

◇　◇　◇　◇　◇

――しかし、割りと思索に耽っていたのに到着の兆しはない。待ち合わせ場所にそれしい人影は一切なく、絶賛待ちぼうけ中である。ホストが客を待たせるとか教育案件、ケジメは免れない……大人ならと但し書きがつくが……

スマートホンの履歴を確認しても新着メール通知、着信記録もなし、溜息を一つ。ふ

と気になって最近勧められたばかりのアプリ、ＬＩＮＥの方を見ると新着多数だった。
送られた文章は、電車乗り過ごしたから送れる。他にも1人参加するから楽しみにしてよね！等々、直近の数件は音沙汰がまったくないのに焦れたのか、御免！謝るから、気を悪くしないで、項垂れた涙目の猫のスタンプと焦りが伺える。
これ以上返事をしないと逆ギレされそうなタイミング故、急いでフォローすることにしよう。
「ごめん！ごめん！けいと集まるのに手間どっちゃって、失敗しちゃった。遅れて悪かったわね智」
「許して！とも～怒らないでぇ！」
返信の後、無事合流。文明の利器さま様である。
「二人共こんにちは。気にしてないからいいよ。現地集合ではなく、地元から集団行動すべきだったのを訂正しなかったミスもあるし、私にも責任の一端があるから」
「そう？良かったぁ～録に返事来ないから怒らせたかとドキドキしちゃったもん」
「ううん、人混みに圧倒されて、ただ意識が飛んでただけだよ」
意固地にならず、謝罪を流すが吉。意地悪く振る舞えば、謝罪の姿勢をとってるのに許さないのは許せないという逆ギレが発生する可能性が高く、面倒がねずみ算式に増えてしまうものだ。

「窘めることはあっても、本気でキレてるところみたことないからねぇ……あたし達がその初めてを体験する羽目にならなくて、ホッとしてる」

餓鬼相手に怒髪天を突くとか大人げないのにも程がある。これでも中身人生経験２０余年……大抵は表じゃ笑って済ませてきた。社会人なら兎も角、同年代に見抜かれるはずはない。

「――――過ぎたことに拘ってても良いことない。楽しみにしてたお買い物の話しよ。ね？」

「くよくよしてても、しょうがないか……さて切り替えてテンションアゲアゲでいきましょ！」

「……転換も大事だけれど、公共の場で唐突に大声出すのはやめよっか。注目浴びて恥ずかしいし」

「あ～う～」

周りの視線を一瞬とはいえ独占したのに気付いたのか、慌てふためく様は微笑ましい。人は誰しも一つにかまけてしまうと足元が疎かになるもの。それが子供なら尚更である。

天気晴朗、春のうららかな日差しがアスファルトを差し、初夏は未だ遠い。出歩くに相応しく、買い物日よりとはこのことだろう。

歩くこと数分、目的地に到着。駅前の上にシンボルとしても有名なので目印に困ることなく着ける点はありがたい。かのお洒落に気を一度も使ったことのない人間だろうと……誰もが知る建造物マルキュー。女子大生から女子中学生を中心とした化粧品、アクセサリーと服が１つの建物で賄える地下二階、地上八階からなる１０フロアに１２４店舗をも集約した一大商業施設である。

「うわぁ～超デッカイし！超人いるね！お祭りみたい」

「見てみて、あっちにブランドの春の新作展示してるよ！地元とは一体なんだったのかしら……」

お目当てを前にテンションの上がりきった彼女たちは忠告なぞしてもどこ吹く風、口酸っぱくしても、うざかれるだけ損だろうからスルー。それよりも問題なのは、周囲に香る香水やら化粧品の匂いで……否が応でも女を意識させられることだ。辺りを見渡しても女！女!!女!!!半端のないアウェー感、内心たじたじで心臓がさっきから煩い。

「あっ、そうだ。けいとともの今日の予算ってお幾ら万円？因みに自分は諭吉三人に樋口二人」

「あたしの手持ちは諭吉さん三人でのぐっさん七人だよ」

「私は諭吉さん……五枚かな……」

軍資金に五万……女の子用の軍資金ってやつだろうか、額を聞いた時は唖然とした

ね。こんだけあれば、据え置きの最新ゲームハード買っても余裕でお釣りが来る大金だ。自分の額に比べて少ないって言っても、両者軽く数万円は突破してる懐事情……男女差別反対と訴えたい今日この頃である。

「うわぁ～太っ腹だね～ご両親羨ましいなぁ」

「この娘の家パパとママは、買い物しないともが経緯はどうあれ服を買いに行くことなったのが嬉しかったんじゃない。それでこの奮発っぷりなわけ」

大体合ってるから困る……真逆麗華にまで見透かされるとは……割りとショックだ。

逃避ついで縞々模様のがま口に盗難防止用のチェーンを内ポケットに留め仕舞う。

「もう一答えはしたけど、あまりお財布の中身について語るもんじゃないよ？泥棒さんが盗み聞きしてるかもしれないし」

は～いと元気よい二人の返事で力が抜ける。隅で話しててもひったくりやスリからしてみれば、鴨葱に等しいのは明らか。犯人の視点から思考を重ねたら自ずと分かるだろう。常に注意深くしておいて損はない。

幸い、現在地で巻き込まれる心配のある犯罪はほぼ金銭関係の盗難のみ。児童誘拐に関しては女の園でしかも集団行動中、ある程度度外視して構わないはず。それにガストレア対策に都市部では監視カメラによる監視体制が確立された昨今、すぐバレるようなところで犯行に及ぶ阿呆はいない。児童が急に行方不明になる噂が一部で出回ってる

そうだが……誰かが面白がって作った都市伝説に違いないな

「ねぇ～これどうかな？」

「私たちに必要になるのはもうちょっち先だよそれ……戻してこよう」

ブラジャーを胸に当ててもまな板同然の平原じゃ、メジャーで測るまでもなく不要なのは一目瞭然。精々背伸びして必要なのはタンクトップ状のインナーだ。寄り道せぬよう手を引いて誘導する。

呪文のような単語の羅列がびっしりと並ぶ案内表示板から、三人が各自に調べた小学生向けのテナントを探し歩く。

「けいあなたこれ、似合うと思う？」

「絶対似合うよ！れいかちゃん。今度学校に来てきたらどうかな？」

彼女たちご指名のショップを訪れると、壁から廊下側に至るまで、ところ狭しと服や小物が並んでいた。気圧されて、思わず後ずさり……陳列されてる系統があまりにアレなのだ。

麗華が持ってるズボンを分類するとショートパンツ、しかも最も短いタイプの恐らく股下５ｃｍ以下の丈であろう狂気の産物、ホットパンツである。普段からオレンジ色したポニテールを棚引かせる活動的な少女がアレを着たら、動いた拍子にショーツの一部がチラチラと見え隠れしてしまう……問題ありすぎて、何処から突っ込むべきか悩む間

にも事態は悪化の一途を辿っていた。
「ふむ感触は悪くないのね。だったら休み明けに早速お披露目してみんなの度肝を抜いてやるのも面白そうかも」
「いいねいいね～あたしも欲しくなって来ちゃった。新学期を待たずにデビューしちゃおっか」
いとも容易く腐った蜜柑が伝染している……今の服装は方やノースリーブのキャミソールにミニ・スカートで、もう一方は、上は同じくキャミに下はただのショーパン。肌の露出が多い傾向にはあるものの派手と呼べる範疇に収まっていた。しかし……あれはもう痴女と言っても過言でない。児童買春すら連想するレベル、本人に自学がないのが質悪い。
きゃっきゃっと頭の悪いフレーズを背にして、試着姿を披露するのにはもう絶句。
……というか「この夏、意中のあの子視線を独り占め♡暑さに負けない熱いアバンチュールを体験しちゃおう!」って売り文句はビッチか?ビッチなんですか!?
「こういうのあるよ～ぴったりだよ!買っちゃおう」
「あはっ……あははっ……」
遂には感染拡大を目指すべく、俺にまで試着を勧めてくる始末。へそ出しルックは標準な上にオプションで胸元まで大胆な切れ込みがあるのが怖ろしい。夜道で君いく

らって？尋ねられかねんぞこれ……

「だーめ。分かってないわね。ともにはこっちの方がだんぜんよ」

腰までスリットの入ったドレス且つこちらも谷間見せつける仕様。ドレスはドレスでもキャバドレスなるお水の商売をするお姉さん御用達の衣装じゃねぇか……小学生サイズのブツがあるのが不思議でしょうがない。なんなんだこのショップは……まともな服を選ぼうにも影も形も見当たねぇ。

「マルキューに来れてよかったね。気になってた売れ線も確かめられたもん。それに――」

「入荷待ちもしないで済むからでしょ？」

「ふふっ、あった～りぃ～」

店内には自分たち以外にも客は多く、信じらないことに需要と供給が立派に成立していた。レジへの人の出入りも悪くない。刹那とはいえ間違っているのは自分？と思わせられたが、やはり正しいのは己。少なくとも親はもし私が、上記の服を買って帰った場合、嘆き悲しみ緊急の家族会議が開催するはず。ごちゃごちゃ文句つけたが、間違ってると断ずる理由はそれだけで充分だ。今の自分があるのは親のおかげ……父と母こそ…・俺、もとい私が最優先すべきもの――絶対に負けられない戦いがそこにある。

◇　◇　◇　◇　◇

口八丁手八丁、感情で説き、利で口説く説得の末……思いとどまらせることに成功。一応の勝利を得た。親が悲しみ、感情を露わにお小遣いが減額、最悪差し止められるよと脅したのが功を奏したのだろう。買ったのはアクセサリーのみ。自分は落ち着いたショップで、水色の涼し気なワンピースに夏用の大きなリボンがあしらわれた麦わら帽子。清潔感もあって適度に洒落たのを購入した。親と自分、両者の面目を保てると一心地であった。

時刻は短針が五に近い四を指し、帰宅に費やす時間からいって駅に向かうに丁度いい。

「二人共そろそろ帰るよ～門限からして、道草くってる余裕あんまないからね？」

「え～せっかく渋谷まで来たのにまだ遊びたりなーい。帰るのつまんないー」

「門限破るのは不味いわ……正座、正座は……いや」

嫌な記憶がぶり返してもしたのか、肩を抱いて震える麗華。中々のお灸を据えたらしい。

「お小遣いを貯めて、計画立てればまた来れるから、次のためにも楽しみは取っておこう？夏頃には来れるからさ」

帰り道、駅までの道程を二人と一緒に歩きながら、気負いなく語ってた。注意だのなんだの騙って、装ってた自分は結局のところ……盲目に明日も平穏が続くと信じてたのだ。

――なんて無様。ずっと後になってからも、この時のことを延々と思い出す。

「おい……おかしくね……あれ？」

「嘘でしょ……こっち来てるわよ!?不味いんじゃないの？」

喧騒が世間話から戸惑いを帯びた声に変わり、思わず振り返る。ゆらゆらと蛇行する乗用車が視界にちらつき、減速どころかアクセルべた踏みの加速を以って歩道に近づきつつあった。

空白する思考の最中、その時目に入った麗華と蛍の横顔が脳裏に焼き付いている。彼女たちが最後に自分に魅せた、屈託のない笑顔が――

そうして色々なものを失った。地に堕ちて這い上がれない……更に底があるのも知らずに嘆く愚者だったが故に。